

松任谷正隆の

僕のひとりごと

02

VOL.02 五右衛門風呂

連載の2回目である。

暫くは僕の生まれた杉並区高井戸の家のことを書こうと思う。

1950年代。もはや戦前にする思える遠い昔だ。

家のロケーションを言えば、まず玄関を出ると目の前は畠だった。

田んぼじゃなくて多分畠。やたら広かった印象がある。2000坪くらいはあったのではないだろうか。

斜め左には新しめの家が何軒か立っていて、手前がヒロミちゃんの家、その奥がハルミちゃんの家で、
2人とも僕と同じ年だった。

一方逆側、つまり斜め右にはミーちゃんの住む古い小さな家があったが、同じ年だったかどうかは定かではない。

こここの家には肥だめがあって、いつかミーちゃんを落してやろうと密かに企んでいた。

つまり生意気なやつだったんだろうな。

玄関とは反対側はちょっとした空き地で、その向こう側が環状8号線。

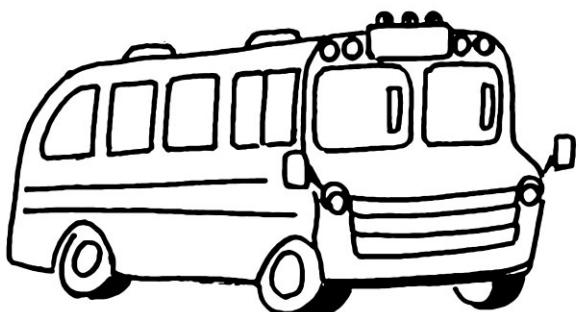
もちろん、50年代はそんな名前もなくて、舗装もされていない、土埃の立つただの道路だ。

道路の向かい側には八百屋があって、よくそこから転げ落ちたトマトがクルマに躰かれていた。

それがまるで吐瀉物のようで、それが原因かどうか分からないが、

トマトというものが気持ち悪くてずっと食べられなかった。

ヒロミちゃんと僕は同じ幼稚園に通っていて、
毎日のようにバスの一番前の席の取り合いをしていた。
バスと言ったって送迎用なんかではなく、ただの公共バス。
これで荻窪までの往復をするのだ。





よく子供だけで通園出来たものだ、と不思議に思うが、
当時はどこの家でも、親が付きそう、なんて風習がなかったのだろう。
バスのスピードメーターはワイヤーが緩んでいるせいか、
盤面をぴくぴくと動き、それを見るのがなぜだか大好きで、
メーター近くに座るためにヒロミちゃんとダッシュをするのである。
ある日、大声を出しながらこれをやっていたら、
運転手に「おまえら殺すぞ！」と怒鳴られた。ひどい言いぐさだ。
今もしこれを親に言いつけたら、運転手はきっとクビだろうな。

ある日、バスを降り、ヒロミちゃんと立ちションをした。うちの前とは別の畠の前だった。
今考えると、ヒロミちゃんは僕に負けまいとして、立ったままおしっこをしようとしたのだと思う。
おい、足がびしょびしょになってるぞ、なんて言いながら目を移していくってギョッとした。
なんだ、これは・・・！
ま、男ばかりの家だったから知らなくて当然だったのである。

夜、五右衛門風呂に母親と入りながら、その日のヒロミちゃんとの話をすると、
頭ごなしに「そんなつまらない話をするんじゃない！」
と怒られた。ひどい怒りようだった。それがまたショックで、
そのせいで僕は性に過敏になってしまったのだ、と今でも思っている。
五右衛門風呂は外から薪をくべてお手伝いさんが燃やしていた。
パチパチという音と、火傷しそうな鉄の敷いてある底と、あのやりきれない気持ち。
それらがセットになって僕の記憶の中に深く刻まれている。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。
4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。
20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、
バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。
その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。
鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。
2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。
日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。
著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy